

二〇二〇年度 公募制推薦入試

教育学科	受験番号	氏名
------	------	----

次の文章を読み、後の問（問1～問4）に答えなさい。

子どもは、いつの頃から「子ども」と呼ばれてきたのだろうか。人生のある期間に滞在する人に対して、単に「人」ではなく、また、「男」あるいは「女」でもなく、「子ども（児、童）」という特別の呼称を与えるようになったのは、人類史のどのあたりに位置づく出来事なのであろう。「子」あるいは「子ども」は、「親」あるいは「大人」と、対をなす概念である。したがって、呼称の出現は、人間の意識の世界で、「生み、育てる者」と「される者」、あるいは「生の歳月を重ねた者」と「生まれて間もない者」という区分が生じ、両極が分化したことを物語っている。

ところで、一般に、大人と呼ばれる人たちが、「子ども」という語を口にするとき、「現在の自分」を無意識裡に基盤に置いて、自身のありようを「人間の※当為」と前提しつつ、そこに至り得ぬ未完成態として「小さな人たち」をとらえていることがしばしばである。いうまでもなく、子どもに関する言及の多くも、また、この視座からなされるのだ。

子どもが、「大人とは異なる独自の存在である」という見解は、一八世紀以降、ルソーの乱打した警鐘に支えられて、現在までに、一つの定見と化したかのように見える。そして、子どもは、「大人とは異なり」「未分化、未成熟で、未だ社会化されない存在」などと、多くの「未」の字を冠されつつ云々される対象となった。「子どもは、小型の大人ではない」というルソーの提言を受け入れたかに見える現代は、こうして、成人を終着地点とする「発達」という名のルールに子どもを乗せ、その途上にある旅客と位置づけることで、「未だ、成人に至らざる存在」という特性を彼らに付与する。より極言するなら、子どもを、将来に対する「可能態」、同時に、現在における「欠如態」と措定したということもできよう。子どもたちは、現代の文化の中で、成人への道のりを「未だ」少ししか歩いていない、「足弱な旅行者」に墮落させられてしまったのだ。

「子ども」と「大人」の間に横たわるちがいが、生存様式の総体としてではなく、「心身の発達」という直線的な系における差異とのみ把握されるようになったのは、二〇世紀以降の児童研究、特に、実証主義的な心理学の発展に負うところが少なくない。客観性を核として展開した心理学的児童研究は、それなりの成果をあげつつも、他方では、一個の存在としての子どもを、計測可能な諸要素の総計に変貌させた。そして、主観性を排除するあまりに解釈を拒否し、その結果、機械的、図式的な発達理論が、さまざまに世に問われている。それらの科学的に見える明快さは、ときに、通俗性と握手しやすく、社会一般の子ども観を、いつの間にか支配する力を持つに至っている。人々の眼は、「発達段階」とか、「自己中心性」などというフィルターを通して子どもを見るべく、矯正させられたのであった。見方によっては、近代以降の子どもの地位は、児童研究の進展に逆比例して狭く限定されたものになり、大人と子どものかかわりも、また、「発達を促進し、秩序への適応に力を貸す者」と、その「受益者」という、きわめて一面的な勾配関係へと偏るに至ったということができよう。

しかし、子どもは、成人への過程を急がされている旅人でもなければ、未来への「可能態」であるだ

けでもない。それらにもまして、一個の「現実態」として「いま」を生きる存在であり、そのゆえに、固有の生の様態の所有者である。彼らは、彼らの信仰と論理、あるいは、生の法則に支えられて、彼らの世界を生きるのだ。それら生き方の総体をとらえて、子どもたちは、「独自の文化の所有者である」ということも可能であろう。

「子ども」と「大人」が対をなす概念であり、人という系の両端に位置する二つの極であるならば、そして、「大人」という極の周囲には、彼らに固有の文化が形成されて彼らの生存を支えているとすれば、「子ども」という極にも、同じありようを認めてしかるべきであろう。私がここで、子どもの生の現象を、「子どもの世界」という形で独立させ、大人との間を切断了した上で、その差異性を、あえて目立たせてみようとするのは、その所以である。

ところで、このような試みに対しては、当然、次のような批判の声が聞こえてくる。すなわち、仮に、「子どもの世界、あるいは、子どもの文化」なるものを容認したとしても、それは、大人の世界・大人の文化と無縁であり得ず、彼らの文化行為の形成に関しては、常に、身近な大人がモデルとされているのではないか。大人とのかかわりを、遮断して、彼らに「固有の文化」などというものを措定すること自体が、非現実的であり、不可能であろう。と。しかし、その論を徹底させるなら、「大人」と「子ども」、あるいは「男」と「女」など、あらゆる対極的な分類は消滅せざるをえまい。どのような位相においても、人間が、関係的存在以外の何ものでもないことは、自明なのであるから。

そこで、一般には、「子ども」と「大人」を相対的に独立させ、それぞれに固有の特性を認めた上で、「大人」から「子ども」へと手渡される諸影響が云々されることになる。しかし、それならば、同時に、「子ども」から「大人」へと贈られるさまざまな贈物に関しても、目配りを忘れてはならないのではないか。「子どもたちにとっておとなとの接触が有益であるのと同様に、おとなにとっても子どもとの接触が有益であり」「おとなの自分自身に関する了解も、子どもの世界との接触を失ってしまった時には、きわめて貧困なものならざるをえない」という、R・D・レインの指摘を引用しておこう

そのためには、「子ども」と「大人」とを、「発達」という勾配関係から解き放ち、相対する二つの極と位置づけて、それぞれの個性を把握し直すことが必要となる。私が、「差異性」を挺子にして、「子ども」と「大人」の直線系列を解体し、「子どもの世界・子どもの文化」をいいたてようとするのは、このための作業なのだ。

近代以前を生きた私どもの祖先たちが、「子どもは小型の大人ではない」などという、明確な「子ども観」を持っていたとはいえない。しかし、彼らは、子どもの生を全体として直観的に把握し、その特性をさまざまな相に位置づけて、そのゆえに、多様な関係を結んでいたことも確かに思える。例えば、子どもは、神と人との中間に位置して、大人たちを^{シヨクシ}触穢の危険から守るべく機能させられている。また、一方では、凶々しい「たたり神」でもあった。さらに、子どもを、「七歳までは神のうち」とみなすことで、大人たちは、子どもを早世させる悲しみから己れを防禦している。そして、子どもたちは、大人にとって、乏しい生活の中の数少ない「娯楽」であった。近世末期の庶民生活を伝える日記資料の中に、「大笑い致し候」と書き記されている場面は、必ず、幼い孫息子の言動が原因となっている。人々にとって、子どもは、「笑いを喚起する類いまれな芸能者」でもあったのだらう。そして、それは、思いもつかぬことを子どもらがやってのけるからであり、また、大人が容易に外に現わし難いことを、彼らためらいもなく行爲して見せるからであった。

こうして、長い歴史の中で、大人たちは、子どもとの間に横たわるちがいを、無意識裡に活用しつつ、自分らの生のバランスを保ってきた。「近代的児童観」などという形で、ことごとく見すえることをしなかつたために、かえって自然にそれが行なわれたとは、きわめて皮肉ではあるが、興味深いこと④である。

(本田和子「子どもたちのいる宇宙」による) (三少自堂)

※注 当論——哲学で、「人間の理想として(まさに)なすべきこと、まさにあるべきこと」。

指定——あるものを対象として(または)存在するものとして立てること。

R・D・レイン——イギリスの精神医学者(一九二七—一九八九)。

触穢——しよくえけがれに触れること。

早世——そうせい世を早く去ること。わかじに。

問1 傍線部①「子どもたちは、現代の文化の中で、成人への道のりを「未だ」少ししか歩いていない、「足弱な旅行者」に墮落させられてしまったのだ」とあるが、なぜか。

問2 傍線部②「それらの科学的に見える明快さは、ときに、通俗性と握手しやすく、社会一般の子ども観を、いつの間にか支配する力を持つに至っている」とあるが、どういふことか。

問3 傍線部③「子ども」と「大人」とを、「発達」という勾配関係から解放し、相対する二つの極と位置づけて、それぞれの個性を把握し直す」とあるが、どういふことか。

問4 傍線部④「きわめて皮肉ではあるが」とあるが、なぜ「皮肉」なのか。